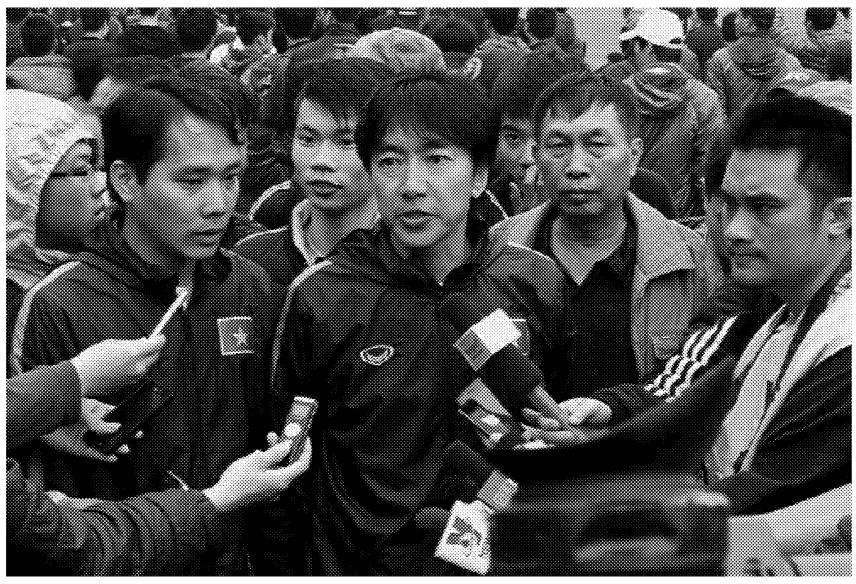
駆ける魂

サッカーベトナム代表監督 三浦（みうら） 俊也（としや）（51歳）㊤

# Jの闘将 先陣切り海外へ



練習試合後、報道陣やファンに囲まれる三浦（中央）

「選手は欧州にどんどん出ていっている時代ですよ。サッカーの市場は世界中に広がっているわけで、監督が国内で椅子とりゲームばかりしているのはおかしいじゃないですか」

ベトナム代表、U―22（22歳以下）ベトナム代表を率いる三浦俊也（51）は正論を吐く。その発言は殻を破ろうとしない日本の指導者を刺激する。「日本人が日本代表監督になるのは考えにくい状況になっている。なぜなら日本しか知らないから。これでは本田圭佑や香川真司に説得力のある言葉を掛けられない」

大宮、札幌、神戸、甲府を率い、2度のJ1昇格を成した三浦は結果的に、自ら海外への先陣を切ったことになる。2011年に甲府を去った後、海外に視野を広げ、指導に不可欠な英語を磨き始めた。「語学力は監督のクオリティーを示すものの一つですから」。13年にフィリピンへの語学留学までした。

ベトナム代表監督就任を打診されたのは14年2月。日本人監督を求めるベトナムサッカー連盟（VFF）の意向を受けた日本サッカー協会が三浦を推した。日本協会は国際協力機構（JICA）と共同でアジア各国に指導者を派遣しているが、三浦は腰掛けの仕事を拒み、VFFに雇われる形にこだわった。

契約は14年5月から2年。ルーズな選手が多いと耳にしていたが、問題はなかった。「外国人指導者の言うことは聞く。ベトナム人監督だとモチベーションが上がらないと選手が言うんですから」

# 容赦ない指導で選手改革

どのチームにいっても、三浦の方針ははっきりしている。戦わない選手、走らない選手、パッションのない選手は使わない。ベトナムの選手には最初にこう告げた。「サッカーをエンジョイしなさい」。その意味合いが、1990年代にドイツでサッカーを学んだ三浦らしい。「エンジョイとはハードな練習をして、強い相手に勝つこと」。そうでなかったら楽しくないでしょ、ということだ。

選手の技術レベルは日本とさほど変わらない。だが、プレーの強度、激しさが足りないのが最大の問題だった。「ぶつかり合いを嫌い、ちょっと当たっただけで倒れる」。それでは三浦の得意分野である守備の構築ができない。

「ベトナム人に対しては人前で怒ってはいけないといわれたけれど、気にせずやっている」。球際で激しく詰めない選手には罵声を浴びせる。その言葉は、とても字にはできない乱暴なものを含む。

三浦は「なあなあになっている」ものを許さない。言い訳も許さない。容赦ない叱責に「誰もサポートしてくれないから、できなかった」と逃げた選手を二度と招集していない。監督の思想が伝わり、闘志を胸にハードワークする選手だけが残ってきた。規律の生まれたチームは昨年末の東南アジア選手権（スズキカップ）で4強入りという実績をあげた。

三浦には確固たる哲学がある。熱を込めて選手をグリグリと刺激し、精神構造から変えていかないと、根底からの改革は進まない。

（敬称略）

この連載は吉田誠一が担当します。



(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。

# 駆ける魂

## サッカーベトナム代表監督 三浦（みうら） 俊也（としや）（51歳）㊥

三浦にとってドイツ留学が転機になった

「転機はドイツに留学したことだと思う。あれで、すべての扉が開いたのかもしれない」。確かに、そこまでの三浦俊也のサッカー人生を顧みると、Jリーグの監督になるような道筋ではなかった。

岩手県釜石市で生まれ、小学4年生のときにサッカーを始めた。体操の国体選手で、新日鉄釜石でラグビーもしていた父親が、野球ばかりに熱中する息子に無理やりサッカーをやらせたのだという。

釜石南高（現釜石高）から駒沢大に進んだが、膝の故障に泣き、4年生で3試合に出ただけに終わった。夢はさらに破れる。高校のサッカー部の監督になろうと、岩手大で体育の教職免許を取ったのに、配属先は部活も体育の授業もない養護学校だった。小中学生の不登校児を預かった。サッカーは東北社会人リーグの盛岡ゼブラなどで続けたが、苦悩は深かった。

### 苦悩の教員時代 反骨心培う

だが、夢がかなわなかったことが、どろどろとした熱を生み出したのではないか。駒沢大の同期で、甲府のゼネラルマネジャーを務める佐久間悟はこう話す。「彼を突き動かしているのは反骨心ですよ」

三浦は結局、指導者になろうと教職を3年で辞し、ドイツに渡る。「コーチングを体系的に学んでおかなければ、教え子である子どもたちに失礼だと思ったので」。1年間、ドイツ語をきちんと学んでからケルン体育大に入学し、5年をかけてA級コーチライセンスまで取得した。

意図したのではないが、その間に築いた人脈が人生を変えるキーになる。同時期にドイツに留学していた田嶋幸三（現日本サッカー協会副会長）が1996年、日本で始めるS級コーチ養成講座を手伝ってほしいと言ってきた。三浦は講座責任者を務めたケルン体育大教授のゲロ・ビーザンツの通訳をしながら、S級ライセンスを取得した。

人生とはわからぬものだ。ドイツでコーチになろうと思っているところに、日本フットボールリーグ（JFL）のブランメル仙台（現ベガルタ仙台）からコーチ就任の誘いがあった。1年務めると、JFLの水戸から監督として呼ばれた。どちらもドイツでできたツテによる。J2大宮のコーチ、監督の職もドイツで知り合ったオランダ人のピム・ファーベークとの関係がもたらしたものだった。大宮から数えて4つのJクラブで監督を務めることになる。

### 独留学の縁 J監督の道開く

もちろん、縁だけでステップアップできるわけがない。ただならぬ野心を抱き、本流をいく者への対抗心を力にしたからこそ、いまに至ったのだろう。

三浦は充電中の2012年に早稲田大学スポーツ科学学術院の社会人修士課程で、欧州の監督の経歴に関する論文を残した。イングランドと日本の監督は1、2部リーグの選手経験者が順に95%、94%を占めるが、ドイツ、スペイン、イタリアでは20%以上の監督にプロ選手経験がないという。

ドイツなら三浦は特異な存在ではないが、日本ではサッカー界の下層からはい上がってきた成り上がりと見なされる。実はそこに三浦の魅力がある。下層にいたからこそ骨のある指導者になったのだ。（敬称略）

掲載日 2015年04月07日 日本経済新聞夕刊 013ページ

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。

# 駆ける魂

## サッカーベトナム代表監督 三浦（みうら） 俊也（としや）（51歳）㊦

U―22ベトナム代表をリオ五輪最終予選に導いた

東南アジア各国のサッカー界は2年に1度の東南アジア選手権（スズキカップ）を重視する。昨年11月の開幕を前に、ベトナム代表監督の三浦俊也は「優勝して国民を驚かせてやろう」と選手を鼓舞した。

1次リーグは2勝1分けで1位通過。その初戦のインドネシア戦で大スターのFWレコンビンと主将のレタンターイを先発から外した。「ベトナム人監督には名前のある選手を外す勇気はない」。何しろ、へたをしたら自分のクビを絞めることになる。

だが、誰をも特別扱いしないフェアな決断を選手は歓迎し、引き締まる。三浦はレコンビンに「途中で出すから、点を取ってくれ」と告げた。すると約束通り、ゴールを奪って第2戦以降は先発の座を取り戻した。監督の刺激的な采配が若手もベテランも奮い立たせたことになる。

## 敵地で勝利 国民の英雄に

準決勝の相手はマレーシア。第1戦を行う敵地は8万人で埋まった。「ドルトムントみたいじゃないか。香川（真司）はいつも、こんな雰囲気の中で試合をしているんだなあ」。おそらく三浦の胸は震えただろうが、クールを装い、そうとは明かさない。マレーシア人が発煙筒を投げ始め、機動隊が抑えに入る異様な雰囲気の中、ベトナムは2―1で逆転勝ちを収めた。

その夜、三浦は英雄になった。ベトナム国民は驚喜し、国旗を掲げてバイクで走り回った。真偽のほどはわからないが、9千万人の国民のうち8千万人がテレビ中継を見たといわれる。

ホームの第2戦には満員の4万人が詰めかけた。選手入場のシーンが三浦の胸に焼き付いている。ベトナム国旗にまじって、数え切れないほどの日の丸が客席で揺れた。「あれは忘れられませんね」

## いずれは欧州… 目標高く

残念ながら、開始早々にPKを取られたベトナムは2―4で敗れ、2戦合計4―5で決勝への切符を逃した。選手たちは涙を抑えられなかった。最後の大会のつもりで臨んだレコンビンは号泣したという。「ベトナムに来て、君たちと仕事ができてうれしいし、みんなに感謝している」と告げる三浦に、中心選手の一人が「申し訳ありませんでした」と頭を下げた。

三浦はすでに選手の心も国民の心もつかんでいる。先月末のリオデジャネイロ五輪1次予選では目標の最終予選進出を果たした。日本を相手にしても守備は大崩れしなかった。球際の速さと激しさが増し、しかも組織的なゾーンディフェンスを身に付けつつある。

そういう中で、三浦は将来の目標を立てている。「アジア・チャンピオンズリーグで日本、韓国と対等に戦えるクラブ、あるいは日韓に接近できるアジアの代表チームの監督。そして最終的には監督として欧州チャンピオンズリーグを戦ってみたい。どうせやるなら、そこまでいきたい」

大言壮語と笑う人もいるだろう。常識外れと思うかもしれない。だが、三浦は自ら限界を設けるような愚かなことはしない。非常識と思われるほどの野望を抱く。それもまた成功する監督の条件なのではないか。

（敬称略）

次回は「ラグビー日本代表 福岡堅樹」を連載します。

掲載日 2015年04月08日 日本経済新聞夕刊 013ページ
(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。